滋賀大学教育学部紀要　教育科学
No.73, pp. 63－76, 2023


# 身近な環境を面白がる
## ―保育環境の「意味」と「価値」を協同探求する散歩についての考察―

山　本　一　成*・髙　谷　武　志**

# Being Curious About Familiar Environment
## A Consideration of Walking Activities to Cooperatively Inquire into the "Meanings" and "Values" in the Environment of Childcare and Education

Issei YAMAMOTO・Takeshi TAKATANI

キーワード：散歩、環境の「意味」と「価値」、エコロジカル・アプローチ、園内研究

### 1　散歩の教育学的意義

2019年5月、大津市で散歩中の園児が信号待ちの間の交通事故により死傷した事故は、大きな衝撃を与えた。その1か月後に、厚生労働省の発出した「保育所等における園外活動時の安全管理に関する留意事項」では、同様の事故から身を守るための対策が示される一方で、「保育所等において、散歩等の園外活動を行うことは、子どもが身近な自然や地域社会の人々の生活に触れ、豊かな体験を得る機会を設ける上で重要である」という散歩の意義が確認され、事前の指導計画および安全への配慮を行った上で積極的に実施していくことの重要性も強調された（厚生労働省 2019）。戦後の都市化に伴い、子どもの安全な生活空間・遊び空間が地域から失われたことには長く警鐘が鳴らされてきた。子どもを「まんなか」に置いた環境の実現は未だ途上であり、子どもたちの安全を守りながら、園外での経験を保障していくことが求められていると言える。

保育のなかで行われる散歩は、子どもの注意機能を回復させる効果（Schutte ほか 2017）や、睡眠への好影響（鹿野・野井 2015）など、その生理的な有用性が指摘されている。しかし、それ以上に、散歩は保育内容として重要な意味をもっており、子どもたちの日常を豊かにする。

5領域においては特に「健康」「人間関係」「環境」に深く関わっているほか（森・横松 2014）、絵本に登場した動植物と散歩を通して出会ったり、それらの出会いをきっかけに季節の歌を口ずさんだりといったように、「表現」や「言葉」とも結びつき、子どもたちの経験を結び合わせ深める機会にもなっている（河崎　2015）。また、人間以外の生き物たちと共同で生成する「共通世界（common worlds）」の経験を生み出し（Taylor & Pacini-Ketchabaw 2019）、地域の文化やコミュニティに心を動かす「場所の感覚（sense of place）」を育んでいく（Judson 2018）。

散歩を通して地域との関係を深める保育の方法は「まち保育」（三輪・尾木　2017）とも言われ、まち全体を保育のフィールドとしてとらえる考え方も広がりを見せている。散歩は、偶然出会う人や生き物、出来事とのかかわりを生成し、保育に「セレンディピティ」（幸運な偶然にめぐりあう能力）をもたらす意味ももっている（久保ほか 2021）。

### 2　エコロジカル・アプローチの視点からとらえる散歩

散歩は、子どもにとってのみでなく、保育者

*　滋賀大学教育学部
**　草津市立草津中央おひさまこども園

にとっても重要な意味をもつ。身近な環境を探索することで得られる偶然の出会いは、場所や空間、事物の意味の知覚を変容させ、保育者自身の学習や成長をも導くためである。

環境内を探索することによって発見される意味や価値が、人間の学習や知覚にとって重要であることを明らかにしたのが、ジェームズ・ギブソンのアフォーダンス理論である。「環境のアフォーダンスとは、環境が動物に提供する（offers）もの、良いものであれ悪いものであれ、用意したり備えたりする（provide or furnishe）もの」であり、環境の側に存在する「意味」や「価値」であると言い換えることができる（ギブソン 1985, p137）。たとえば、私たちは「石」という環境をさまざまな遊びに利用する。石は、「掘る」「転がす」「投げる」「たたく」といった行為にも用いられるし、想像力と組み合わされることによって恐竜の卵に見立てられ、色を塗るキャンバスとして使われることもある（石倉 2011）。身近な環境にはこのような多様な「意味」と「価値」が潜在しており、私たちは自らそれを探索することで新たな仕方で環境と出会い、学習するのである。

ギブソンのアフォーダンス理論を通してみるとき、散歩は多様な「意味」と「価値」との出会いの潜在的なフィールドに出向くことであるととらえなおされる。山本（2019a）は、そのような潜在的保育環境を「出会われていない環境」と呼び、身近な環境に潜在する「意味」や「価値」を協同で探求する保育実践の在り方を「エコロジカル・アプローチ」として理論化した。散歩の教育学的意義は、このエコロジカル・アプローチの観点を通してみることによってさらに鮮明になる。

散歩によって展開する保育環境は、保育者の意図に沿って構成された環境のみではない。むしろ保育者の意図を超えて子どもが「価値」を発見したり、保育者も子どもも意図せずに出会う環境の「意味」や「価値」によって、保育が活き活きと展開していくことがある。

このことをアフォーダンス（環境の「意味」や「価値」）の観点から言い換えると、同じ環境内にいても、保育者が知覚するアフォーダンスと、子どもが知覚するアフォーダンスが異なるということである。図１に示したように、「出会われていない環境」には、保育者にとっての「出会われていない環境」と、子どもにとっての「出会われていない環境」があり、それぞれの知覚が共有されていくことによって、出会うことのできる世界が拡大していくのである。

散歩を通して環境を探索することは、身近な環境の面白さに気づき、生活を通して学び変容していく保育の在り方に深く関わっている。環境を探索する際、子どもは大人よりも対象に近づき、対象を感覚的にとらえる知覚をしている（寺本 1988）。また、大人と子ども、あるいは経験の異なる子ども同士では、対象に重ねられる想像力が変わることによって知覚の仕方に差異が生じる（内田 2017）。散歩を通して、保育者と子どもたちがそれぞれの視点や想像力を交流させ、触発し合いながら経験を深め、広げていくことは、身近な環境から保育の物語を紡いでいく手がかりとなるだろう。散歩は、身近な環境の「価値」を再発見し、「生活の真の面白味」（倉橋 2008, p.45）を味わう保育の方法になりえるのである。

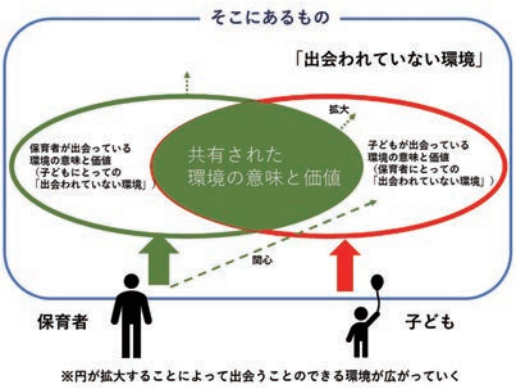


図１　保育者と子どもが知覚する「意味」と「価値」の差異（山本 2019b, p.21）

## ３　笠縫東こども園の園内研究

このような散歩の意義とあり方について、さらに具体的なこども園での園内研究の事例を通して考察していきたい。以下に詳述するのは、「身近な環境を面白がる」をテーマに、第二著者である髙谷が中心となって進めた園内研究の

事例である。第一著者である山本は2022年の6月から11月にかけて計4回笠縫東こども園を訪問し、継続的に園内研究に参画した。

以下ではまず、園内研究の概要とプロセスを記述する。その後、園内研究を通して生じた保育者と子どもの環境との出会いに焦点を当てて、散歩がもつ「意味」と「価値」の協同探求としての意義を明らかにする。なお、事例の公開にあたり施設長の許可を得ている。

### (1) 草津市立笠縫東こども園について

本園は、昭和54年開園の笠縫東幼稚園としての37年間の歴史を閉じ、平成28年、幼稚園型認定こども園「笠縫東こども園」として開園した。JR草津駅から約2km北西に位置し、都市化は進んでいるが、園周辺には、田園風景が広がり、葉山川をはじめとして四季を通して自然を感じられる場所も残っている。教育目標を「友だちと仲よく遊ぼうよ元気な子ども」とし、「よく考える子ども」、「粘り強い子ども」、「友だちと仲よく遊ぶ子ども」をめざす幼児像としてその育成に努めている。

### (2) これまでの笠縫東こども園の園内研究から～実態と目指すもの

笠縫東こども園では、ここ数年、「主体的に環境に関わり、遊び込める子ども」を研究主題にして環境構成や援助の在り方を保育実践や事例検証などを通して、園内研究会の中で探ってきた。例えば、「環境のビフォーアフター」と称して、保育室や園庭の遊びの環境を再構成していくことで変容していく子どもの姿を探った。その結果、保育者の効果的な環境構成が主体的に環境に関わる姿につながることが分かった。

これまで研究の中で取り上げてきた環境は、主に保育室や園庭が中心であったが、近年、野草に触れたり、生き物に関心をもったりと、特に園外での素朴な体験の不足は否めなかった。また、職員からも、わくわくするような園内研究会にしていきたいという思いもあり、本年度は、視点を変えて「散歩の保育研究」を窓口に保育者自身も気が付いていない身近な環境の面白さを探っていくことにした。

環境の構成や再構成となると保育の経験や技術を要することはもちろん、保育の専門職として日々磨いていく必要があり、見通しや計画など、保育に裏付けがあるからこそ子どもに豊かな学びを提供できると捉えている。しかし、保育者が仕掛けた「意図的な環境」だけでなく保育者も意図しない「偶然の環境」にこそ面白さや子どもの心を揺さぶる可能性が潜んでいるのではないかと考えた。

### (3) 子どもの関心と保育者の関心

保育者は、子どもの興味関心には、敏感である。子どもの関心を捉えることで、次の保育のイメージを描くことができ、環境構成への手がかりとなるからだ。しかし、その逆もあることをこれまでの環境をテーマにした保育研究の中で明らかにしてきた。保育者の環境への関心が子どもたちに伝染していく。例えば、チョウの幼虫を大事に飼育する保育者の姿を見て、周りの子どもたちも大切に扱うようになる。そして、親しみや生態を探ろうとする知的好奇心へとつながる。そのような場面を保育の中でたくさん見てきた。子どもの関心と保育者の関心は相互作用を繰り返し高まっていくと考えた。

そこで、研究のテーマを「身近な環境を面白がれる子どもと大人」として、まず大人が今ある環境に興味、関心を持つこと、身近な環境にこそ、面白さが潜んでいるのではないだろうかと考えた（図2）。これまで、「豊かな環境」とは、「豊かな自然環境」と思い込んでしまい、今ある環境に保育者が物足りなさを感じてしまっていたのかもしれない。

具体的な実践として、園の近隣の地域をまず

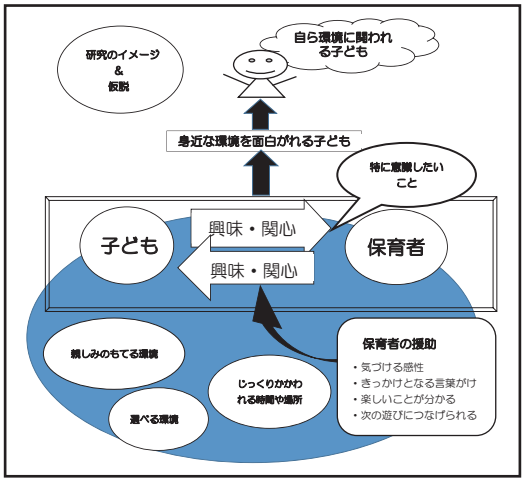


図2　園内研究のイメージ

保育者自身が探索し、保育者が素敵と感じる環境を探した。今までは、目的地としなかったような、園外近くの変哲のない空き地や小さなため池などにも注目し、子どもたちと散歩にでかけ、ちょっとした環境も楽しめるようにした。

このような子どもたちと保育者が楽しみながら園外の環境に関わっていく時間を本園のマスコットキャラクター『スマイリー』と『探検』をかけて、『スマタン』として称して活動してきている。これから紹介するクローバー畑やメダカ池などの事例もスマタンでの出来事である。

取り組みを進めていく中で保育者の関心が子どもの関心の高まりにつながっているような場面がよく見られた。また、逆に子どもの関心が次の保育の足がかりにもなっている。保育者と子どもの関心が重なり合いながら、共に育っていくものを大切にしてきた。

### (4) 研究の進め方～面白がれる保育者への道～

第二著者である髙谷は、5年間、笠縫東こども園の保育研究主任として園内研究会を進めてきた。年々高まる保育のニーズや働き方の改革もあり、かつてのように十分に園内研究会の時間が確保できないことや参加者が限られることが悩みであり、研究の取り組み方を工夫する必要があった。そこで、「身近な環境を面白がれる子どもと大人」のテーマに沿い、散歩での一場面が蘇るような保育記録作成を意識し、事例研究を主として、限られた時間の中でも持続可能な園内研究会を進めていくことにした。散歩を通して、身近な環境に関わっていく子どもの変容と共に保育者の変容を面白がりながら探っていった。

## 4　事例と考察

### (1) 環境の可能性～面白がる子どもと大人の物語の始まり～

#### ①スマタンⅠ　5歳児5月「ピーピー豆」の事例から

園から歩いて10分程の空地に出かけた。事前の下見の際には、一見何もない場所であるが、クローバーやカラスノエンドウが咲いているところに興味をもつのではないかと考えていた。当日、現地に着くと案の定、カラスノエンドウの実を集めることに夢中になる姿があった。「袋いっぱいになった。」「これでごちそうをつくろう。」と友だちと満足そうであった。

写真１「ピーピー豆」との出会い

写真２「ピーピー豆」を並べる

保育室に帰ると担任R先生が用意した、新聞の上に其々が拾ってきたカラスノエンドウを広げた。すると、ピーピー豆（笛）を作ろうとする子どもが現れた。空地で、引率していたF先生が吹いていたのを思い出しながらこしらえている。他の子どもたちも興味をもち、見様見真似でやってみるが、うまくいかず職員室のF先生のところへ教えてもらいに行くことにした。

皮や筋をきれいに剝くことは難しいようであるが、繊維の向きを考えて剥き方を工夫する子どもや皮を剥むことで現れる豆が互い違いで並んでいることに気づく子どもの姿が見られた。

なかなか上手くいかないが、やってみたい気持ちや豆にとことん触れることで気づく面白さなどを感じながら、ピーピー豆づくりは、昼食後も続いた。

②事例研究でのやりとり

●参加者から担任Ｒ先生に質問

「なんで新聞の上に取ってきたものを並べたか」

担任：「正直、散歩で拾ってきたものをどうしたらよいか分かりませんでした。Ｉ先生がいつもしているから。色や種類別に分けているのを見て、素直に先輩の真似をしてみました。」

●みんなで思案　お題～散歩で拾った物ってどうしたらよいのかな・・・～

Ｔ先生：「お家の人にお土産って家に持って帰ることも多いよね。」

Ｓ先生：「以前、散歩で持ち帰った草花で色水を作ったことがある。やっぱりその時の遊びに生かしたいなって思う。家に持ち帰ったとしても、新鮮さが無くなってシナシナになってしまうし、その時の遊びに使ようにしてる。」

●テーマの視点から

Ｍ先生：「保育者が楽しむことが大事だと思う。Ｆ先生が楽しそうに空地でカラスノエンドウの笛を吹いたことがきっかけとなって、子どもたちにとって豆であったカラスノエンドウはピーピー豆へと変わった。何か特別なものになったのではないだろうか。」

③考察

自分が分からないことを他の保育者や子どもの前で素直に発信できる担任Ｒ先生は素敵である。園内研究会の場では、散歩についてみんなが考えるきっかけとなった。保育者もクラスの中の生活者であり、子どもと共に考えていく経験の積み重ねが、お互いの成長を促しているといえる。また、袋いっぱいに集めることを喜び、ごちそうに使うはずであった豆がＦ先生が笛にして見せるということで新たな環境の可能性を引き出した。保育者が面白がることで、子どもたちも面白がっていくことが分かりやすく捉えられた事例であった。

このピーピー豆の事例が今研究のスタートとなり、その場に居合わせなかった保育者たちも事例をもとに想像し、思いを出し合える場にしていくことを基本として研究を進めていくことにした。

④出会われていない環境

前節で述べられているとおり、園外のなんの変哲もない空き地は、園内研究を通して保育環境として活用されるようになったものである。その意味で、空き地に生えているクローバーやカラスノエンドウは、園内研究を通して発見された環境の「価値」である。

さらに、そのカラスノエンドウに、Ｆ先生は「吹く」というアフォーダンスを知覚する。カラスノエンドウがもつ「吹く」というアフォーダンスは、子どもたちにとって新奇で魅力的なものであり、子どもたちはそのようなアフォーダンスを利用するための技術へと動機づけられる。

このようにアフォーダンス知覚を集団で共有するプロセスを、エドワード･リードは「意味と価値を求める努力の集団化」と呼んだ（リード 2000）。リードによれば、人間の文化的実践は、環境内のどのようなアフォーダンスが注目され、利用されるかの傾向として説明できる。たとえば散歩道に生えているホトケノザは甘い蜜を「吸う」ことができるし、ノビルは「食べる」ことができるが、それらのアフォーダンスは文化的に学習されなければ知覚されることはない。Ｆ先生を通して子どもたちのカラスエンドウの知覚が変容したように、散歩は環境に潜在する「意味」と「価値」の利用を促進し、知覚の変容を引き起こす文化的実践となっているということができる。

(2) 想像力の混ぜ合わせ～子どもの空想×保育者の発問～

①スマタンⅡ　４歳児６月『イシクラゲ』の事例から

雨上がりの園庭で保育者とイシクラゲを見つけた子ども。「プニョプニョや」と触ったり、ちぎったりして遊んでいる。同じクラスの子どもがやってきて、「これ、好きやねん。みそ汁のわかめ。」と食べる真似をして見せた。やってきた子どもは、イシクラゲという名前や生態は知らないが、それが園庭に存在していることは知っていたようだ。「ここにもある。ここにも。」ブランコの周りの黒い物が全部イシクラゲだったことに気づき喜んで集めだした。

「なんでこんなところにわかめがあるんやろうな。」保育者が問うと「海から風で飛んできたんちゃう？」「カラスが咥えてきたとか。」と答えた。

「あ、今動いた！」子どもには、そう見えた

写真３　イシクラゲを集める

らしく、保育者も「生きてるんやったら何たべるんやろうな？」とさらに問うと「わかめやったら、ワカメ食べるんちゃう？」「こども園て、昔、海やったんと違う？」と想像力を働かせた。

数日後の散歩で・・・4歳児の子どもたちは、園から程近い空地に散歩に出かけた。クローバーつみやカラスのエンドウを集める子どもたちであったが、「あ、わかめや！パリパリや。」と、ここにもイシクラゲがあることに気がついた。保育者も「こども園でも見つけたね。あの時は、プニョプニョやったのにね。」と発見を共有する。「だけど、ここは（地面に接していた側）プニョプニョなんやで。」と教えてくれた。

保育者もこのパリパリのイシクラゲがなんとも面白いと思い、こども園に持ち帰り、子どもたちと調べてみたいと思った。

保育室にて、イシクラゲを前にしてクラスのみんなが集まった。「これなんだろうね。」保育者が改めて問うと、「のり！だって黒くてパリパリしてるもん。」「とんかつ！サクサクしてるから。」と感触の特徴でイメージを膨らませているようだ。そこで、散歩で部分によって感触の違いを発見していたことを思い出し、「何でパリパリの所とプニョプニョの所があるんだろうね？」と、保育者がもう一度投げかけてみた。すると、「水が無くなったんちゃう？」「そう！あ、わかった！パリパリになったのは、水が無くなって乾いたから。」と続けて答えた。さらに保育者が「じゃあ、なんでプニョプニョなのはあるの？」と尋ねると「わかった！水を飲んだらプニョプニョになるの！」「そうそう。水があるとだんだんパリパリがプニョプニョになるの。」と続けて答えた。「本当にそうなるんかな。やってみようか？」と保育者の提案で実験が始まった。

「ワクワクするね。水を入れたらどうなるんだろうね。」保育者がボウルに入ったイシクラゲに水を入れてみる。「きっと、ブニョブニョになるよ。何でも水を入れたらベチョベチョになるでしょ。」しかし、子どもたちの予想に反してあまり変化がなかった。すると、イシクラゲを揉みだす子どもが現れた。だんだんと柔らかくなり、ブニョブニョになった。「ほーら。言った通りでしょ。」少し誇らしげな表情を見せた。

写真４　イシクラゲに水を入れる

②担任の思い

今まで砂場で水を使って遊ぶ中で、砂に水を混ぜながら泥にしたり、乾いた砂を探してさら粉にしたりして水分量が変わると物の性質が変わることに遊びながら気が付いていたのかもしれない。その経験から、子どもたちの中からも自然に「水をいれてみよう」という発想につながったと思う。イシクラゲに関わっていく中で、だんだんと面白いことに気が付いていくことができたが、思った以上に水を混ぜた時のイシクラゲのにおいがきつかったので、その場から離れてしまう子どもの姿もあった。もう少し触れてみたいと思えるような環境を整えておくとよかったかもしれない。

③参加者から

A先生：「実験する大人と子どもが面白い。」

Y先生：「イシクラゲへの疑問が先生と子どもの

やり取りをしていくことで、ちょっとずつ子どもの考えている方向へつながっていくところがおもしろい。」

**E 先生**：「自分もイシクラゲの存在を「なんかいるな」のままにしていた。乾燥ワカメを水につけたら膨らむことを知っている子が何人いるだろうな。経験差があるだろうから、先生が本物のワカメを持ってきてもいもいいかもしれない。他に水で戻すと増えるものはなんだろうか。今後、今回の出会いと結びつくときに期待したい。

**④考察**

イシクラゲは新しく発見したわけでなく、見たことがある。なんとなくそこにあることを知っているといった存在だった。それは子どもだけでなく、大人もそうであった。見過ごしていたわけではなく、気にも留めなかった存在であった。今回あえてそれにピックアップして関わったことで、水につけると姿が変化することや体積が増えるなど、様々な発見を友だちや保育者と楽しむことができた。

4歳児がファンタジーと実体験を行ったり来たりしながら仮説を立てて答えを導きだそうとする姿に保育者も、「なんで？」「どうしてそう思う？」など、ふんだんに考える機会を与えているところが子どもたちの想像する力につながっている。そして、最後まで正体は不明のままのところのままのところも素敵である。

イシクラゲの事例はこれで完結かもしれないが、例えば、ナメクジや乾燥ワカメなど、今後、同じ性質（水分量で姿がかわる）をもつ環境と出会ったとき、今回の子どもたちの経験が結びつくことを期待できると考える。

**⑤出会われていない環境**

園庭でも見かけるイシクラゲは、散歩を通して新しく発見された対象ではない。しかし、この事例のなかで、保育者と子どもは園庭と散歩先での体験を結びながら、想像力を通したかかわりによってその環境と出会いなおしている。

ジョン・デューイが述べるように、想像力は物語や表現活動のみに働く作用ではなく、日常の経験全体に働いている。「想像力は、諸事物が統合的な全体性を構成していくのを、見とり、感じとる仕方である。想像力は、心が世界と接触するところで、広くおおらかに、もろもろの興味や関心を融合させる。古く、見慣れたものが、経験において新しいものに変わるとき、そこには想像力がある。」（Dewey 1934=2005, p.334, 一部改訳）。想像力は、ありふれた対象の知覚を変容させ、新たな「価値」との出会いと探求を導く働きとなる。

イシクラゲをみそ汁のわかめに見立てた子どものイメージの世界に、「なんでこんなところにわかめがあるんやろうな」と保育者が問いかけることによって、イシクラゲはさらに興味深い対象へ変わっていく。この想像力の混ぜ合わせによって、子どもたちのなかに「生きているものどうしの想像力」（Yamamoto 2022）と呼ばれる関係への想像力が働きはじめたことが見て取れる。「生きているものどうしの想像力」とは、目の前にある事物に生きている存在として出会い、その来し方行く末を想う想像力である。それは、「あなたはどこから来たの？あなたはだれ？あなたはどこへ行くの？」という問いかけを生む想像力であると言い換えることができる。

この事例では、まずイシクラゲが「海から風で飛んできたんちゃう？」「カラスが咥えてきたとか」というように、過去への想像力が働いている。そしてその後、自分たちと同じ生きているものとして、イシクラゲが何を食べるのかについての想像が生まれている。生きているイシクラゲとの出会いによって、子どもたちはイシクラゲをめぐるエコロジカルな関係へ興味を広げている。

イシクラゲへの高められた好奇心は、再び散歩のなかで出会う「バリバリのイシクラゲ」に向かう。そして、保育者がイシクラゲに共に出会い直し、「面白い」と思うことによって、調査や実験といった保育の展開が生まれていく。ここには散歩をきっかけに、乾燥と湿潤の「対比」や、泥遊びなどの過去の経験からの「類推」、水をあげたら元に戻るという「仮説形成」といった科学的探究の条件が生じている。

ドイツ語の Einbildungskraft が、「想像力」とも「構想力」とも訳されるように、想像力は、問いを生むことや仮説を立てることに密接にかかわる作用である。環境との出会いに子どもや

保育者が想像力を働かせることによって、ありふれた事物の新たな「意味」と「価値」の探求が生じていく。散歩は想像力と組み合わされることによって、身近な環境と出会い直す契機となるのである（下村 2017）。

**（3）経験の連続性～五感で面白がれる子どもと大人～**

**①スマタンⅢ　４歳児 10 月事例『みずみずしいっていい香り♡　～キンモクセイに触れて～』**

園庭のすぐそばに、キンモクセイの木があり、秋になるとキンモクセイの花のいい匂いが漂う。この匂いが大好きな４歳児のクラスの子どもたちの事例である。

近隣の公園に散歩に出かけた４歳児の子どもたち。たくさんのキンモクセイが植わっていることに気が付いた。公園一帯にキンモクセイのいい匂いが漂っている。子どもたちは、このいい匂いを保育室に持って帰ろうと喜んでキンモクセイの花びらを集めだした。散歩に出かける時、いつも首から下げられる探検バックを持っていくのだが、この日は忘れてしまい、多くの子どもは、保育者が持っていた小さなビニール袋をもらい、保育室に持ち帰る用に集めていた。公園でたくさん遊び、香りも堪能し園に帰る時間になった。いつもなら、バックを首からかけて歩くのだが、紐がない袋なので、自分のポケットに入れて持ち帰った。園に到着すると、もう一度キンモクセイの香りを嗅ごうと袋を開き子ども同士で匂いを嗅ぎ合う姿があった。すると、「しっとりしてる。」「湿ってる。」とキンモクセイがポケットの中の湿気と温かさで色が変わり、湿っていることに気が付いた子どもがいた。保育者が湿っていないキンモクセイを渡すと、「こっち（湿っている方）の方がめっちゃ匂いする。」と匂いを比べている。「ほんまや！」近くの友だちも同じように感じていた。「大発見だね。」保育者は、このことについてクラスの子どもたちと共有したいと考えた。「湿っていると何で香りが強くなるんだろうね。」と保育者が問うと、「土も湿ったらどろどろになるでしょ。その時、めっちゃ匂いするでしょ。だからキンモクセイも濡れたら匂いするんじゃない。」と答えた子どもがいた。そこで、水に濡らすだけでなく他にもいろいろな方法で匂いを出すことにした。

写真５　公園のキンモクセイ

写真６　キンモクセイを水に濡らす

**方法Ａ　水に濡らす➡香り変化なし**
**方法Ｂ　お茶パックに花びらを詰めて上から何度も叩く➡香り強い**
**方法Ｃ　すりこぎですりつぶす➡香り強い**

「みずみずしかったらいい匂いなんだよ。」と言っていた子どもたち。予想に反して水に濡らしても匂いが変わらないことに不思議がっている様子であった。

そして、実験で匂いが強く出たキンモクセイは、お茶パックにつめて「香り袋（サシェ）」をつくった。お家の人にもいい匂いを持って帰れると喜ぶ子どもたちの姿があった。

土・日曜日を挟み、月曜日、拾ったキンモクセイで色水をした。すりこぎでつぶしたけれど、先日嗅いだキンモクセイのいい匂いはなかった。草のような匂いがした。すり潰したら匂いが出ることについては、他にも試しており、ミカンの皮でも試した。ミカンは皮を潰しても匂いが少なく、実の方に匂いがあることが分かった。

また、水につけることについては、マツボックリで試している。かさが閉じている様子をを見て、「マツボックリが寒がっている」という声があった。

②担任の思い

1学期にイシクラゲの実験をしたこともあって、濡らすと変化が起こると確信していた子どもが多く、後日、一度乾燥させてからもう一度濡らし、なんとか匂いが出ないものか試す子どもの姿があった。担任は、ポケットに入れて蒸らされた状態が匂いがするのではないかと思い、紅茶のように水の温度によって変化があることを実験してみようかとも考えた。（そこまでは、しなかったが。）偶然の発見からここまで興味が広がり、みんなで思考を巡らせることができた。子どもたちと一緒に面白がれる大切さを感じた。

③参加者から

T先生「コロナ禍でマスクをしていることもあり、五感の中でも、嗅覚、匂いに鈍感になっているからこそ。保育の中で意識していますか？？」

3歳児のクラスを持つS先生

クラスの中で、匂いが大好きな子どもがいる。キンモクセイの匂いも好きだ。泥水の中にキンモクセイをつけて、いい匂いのスープを作ろうとして、泥水につけたら、「においがしない…」と言っていた。他には、落ち葉にも匂いがあることに子どもと気づいた。乾燥している落ち葉には、匂いがないが、雨に打たれて濡れた（発酵？）落ち葉には匂いがある。少し臭くて病みつきになる。子どもには、「秋のにおいだねって」言った。

Y先生　3歳児の遊びの中で・・・

絵具にバニラエッセンスを入れたことがある。色と匂いが結びついていて、「○色はいい匂い」と言っていた。粘土にも匂いをつけたら、面白いだろうなって保育者自身が思っている。

R先生　そういえば・・・

サツマイモの掘りに行って、掘りたてのサツマイモはいい匂いと言っていた子どもがいた。

T先生　サツマイモ掘りの中で

「土が臭い」と言っている子どももいた。この前、5歳児が散歩に出かけた時、銀杏を拾って臭いことを周りの友だちや先生にアピールして、嗅がせていた。強い匂いは人と共有したくなるのだろうか。

Y先生　ザリガニを飼育していて・・・

1学期から飼い続けているザリガニの匂いを気にしている子どもが多い。臭い匂いが子どもたちが水替えの基準になっていた。たらいで飼っているザリガニの水はすぐ臭くなるのに、水槽で飼っているザリガニの水はあまり臭くならない。子どもも先生も不思議がっていた。

④考察

何より、保育者自身が心を開いて、保育をしていることが尊い。絵の具にバニラエッセンスを入れてみるような、先生が「こうしたら楽しいだろうな」と思う発想が素敵である。また、1学期にイシクラゲの出会いをはじめ、色水あそびや泥遊びなどの経験が今回の水に浸してみたり、すりつぶしてみたりという想像しながら試す行為につながっているといえる。匂いで季節を感じる感性や過去の経験と目の前の物と重ね合わせてやってみようとする主体性など、経験の連続性が保育の物語を紡いでいくといえる。

⑤「出会われていない環境」

探検バッグを忘れるという偶然は、ポケットのなかで湿ったキンモクセイの香りが強くなるという発見を導いた。この発見がさらなる仮説や発想を生み出し、キンモクセイの香りをめぐる経験が再構成されていく。事前に計画することができない偶然を保育の中に活かした、散歩という活動ならではの事例である。

イシクラゲに水を入れてみた経験は、ここでキンモクセイに水を入れる発想へとつながっている。デューイが「過去は想像力の大きな資源であり、生活に新たな広がりを付け加える」と述べるように、過去の経験と現在の環境の出会いが結びつくとき、そこには豊かな想像力が働いている（Dewey 1916=1975, p.126）。イシクラゲをめぐる探究の経験は、異なる場面に応用できる構想力や連想となって、子どもたちに身体化されているようである。

子どもたちが身近な環境と出会いなおすとき、子どもと共にそれを面白がり、共に想像力を働かせる保育者がいることによって、探究のコミュニティが形成されていく。本事例ではそ

のようなコミュニティのなかで、新たな仕方で身近な「出会われていない環境」を探求するテーマとして、「匂い」が焦点化したことがわかる。サシェをつくることや、落ち葉の匂いを感じること、香りのある絵具への発想といったように、多様な仕方で想像力が働くことによって、身近な環境がもっていた探究の可能性が顕在化する。「そこにあるもの」には、汲みつくすことのできない「意味」と「価値」が潜在しているのである（山本 2019a，p.175）。

**(4) 子どもと共に育つ保育者～保育者の発想×子どもたちの構想～**

**①スマタンⅣ　ザリガニとの出会い【5 歳児 5 月】**

こども園から琵琶湖方面に 20 分ほど歩いた葉山川のほとりにあるメダカ池は、ビオトープ状になった小さな池で、とても居心地がよく、子どもも保育者も大好きな場所である。5 月に散歩に行った際にメダカ池で偶然 2 匹のザリガニを捕まえた。捕まえたザリガニをどうするか迷ったが、話し合いの結果、リコちゃんやアカクロちゃんと名付け、みんなで飼育することになった。

写真 7　メダカ池

これまで園庭にいるダンゴムシ等は飼育していたことがあった。しかし、捕まえたその日は、虫眼鏡で観察したり、図鑑で調べたりするが、次の日には死んでいる虫に気づくことや何故死んだのか考えようとする姿が少なかった。生活の中で生き物や命について考えるような時間がとれていなかったことを反省すると同時にザリガニの飼育を機に生や死について、みんなで考えていきたいという保育者の期待と願いがあった。

そんな希望に反して、次の日、小さいザリガニがタライの水面に浮かんで動かなくなっていた。子どもたちとなぜ動かなくなったのか考えた。

「病気になったんだと思う。」「2 匹を別々に入れたから寂しかったんだ。」「水がきれいじゃなかった。」「昨日の夜、暑かった。」「水を入れすぎて死んでしまった。溺れちゃったんだ。」「石が多すぎて挟まって死んじゃった。」などと、話合いが進むにつれ「死んでしまった。」と口にするようになった。

そして、「この間、死んだおばあちゃんのお墓で南無南無したから、お墓をつくりたい。」と言った子どもの提案から、アジサイの横に墓をつくることにした。手を合わせたり、お花をお供えしたりする子どももいた。

育てることができなかったのは残念だが、子どもたちと命について考えるきっかけとなり、生き物と向き合う経験ができたザリガニに感謝したいと担任自身が感じた。

**②事例研究でのやりとり**

**●生き物の生と死について**

**論点ザリガニの死が飼って翌日の出来事であったため、ピンとこない子どももいたのではないだろうか。ザリガニへの思いはいかに。**

**Y 先生**：「ウサギのように体温も感じられないし、表情もない。虫ってなかなか愛着が持ちにくい。きっと時間がかかるのじゃないかな。まずは、死より生を感じることが必要なのかもしれない。これから長く育てることで気が付くことがあるのではないか。」

**S 先生**：「アカクロちゃんの死への思い、お墓をつくった後も続いている？」

**担任 I 先生**：「その後気にする子どもがいない。正直、死んでしまったザリガニへの気持ちは冷めているように感じる。」

**S 先生**：「でも、たんぽぽ組の子ども、たぶん A ちゃんが手を合わせながら墓に何かつぶやいていたよ。気持ちがある子どももいるはず。」

**E 先生**：「A ちゃんは、この間もメダカ池のことを嬉しそうに教えてくれた。メダカ池のことは秘密だって。自分のとっておきにしたいみたい。生き物だけでなく、場所にも愛着をもっているようだ。」

**K 先生**:「死を経験したから、次釣ったらどうするって意見もでてくるかもしれないね。」
**担任 I 先生**:「そうだといいけど。もっと大きいザリガニを釣ってみたい。もっとやってみたいという気持ちの方を強くもっているかもしれない。」
**E 先生**:「そうだね。また行きたいと思っているし、とことん経験させてあげたいね。保護者もたいへん興味をもっておられる。」

お墓をつくってザリガニとお別れするというクラスの雰囲気になったが、ザリガニの存在がほんとうに身近になっていくには、まだ時間がかかるのではないだろうか。まずは、死より生を感じることが必要なのかもしれない。

**③スマタンⅤ　ザリガニチャンネルとザリガニ釣り　5歳児6月】**

残った一匹の飼育を経て、ザリガニが子どもたちにとって身近な存在になってきた。そして、もっとザリガニに出会ってみたいという気持ちになってきた。そこで、ザリガニ釣りを計画する。保育者は子どもたちの意欲がより掻き立てられるように、youtube 風の動画（ザリガニチャンネル）を作成し、メダカ池で保育者が、なかなか釣れないけれど、楽しみながら釣りをしている様子を事前に見せた。また、十分に試したり、考えたりしてほしいと願い、釣りに使うエサは、自分たちで考え、スルメ、チーズ、レモン、ハム、キャベツ、パンなどの候補が出た。中には、「ザリガニの体が赤いから、トマトで釣る。」と述べる子どももいた。保育者はなるべく考えを試せるように準備した。釣り当日、初回は、遠く感じたメダカ池の距離を楽々歩く子どもたちであった。さっそく、それぞれの考えたエサを試した。やはり、保育者の予想通り、野菜や果物より、魚や肉といったタンパク質が多いエサに釣果があった。中でも、ちくわがよく釣れ、最初は、自分の考えたエサを試していた子どもも、釣れた友だちの姿を見て真似るようになり、その多くの子どもの釣り竿の先には、ちくわが付けられ、釣れる面白さを大いに楽しんでいた。

写真８　ザリガニチャンネル

**④事例研究でのやりとり**

**R 先生**:「ザリガニのエサに正解でない意見がたくさんでることが素敵だと思う。そして、それを試させてあげる保育者も素敵。」
**T 先生**:「トマトで釣るって言ってた子どもは釣れたのか？」
**担任 R 先生**:「釣れました。私が、ちくわでおびき寄せてトマトに乗せました。トマトで釣れました。」
**F 先生**:「きちんと先生がアイデアを受け入れてくれて、偶然かもしれないけど、連携プレーで釣れたところが面白い。」
**T 先生**:「それって釣れて、よかったのか。釣れない方がよかったのか。科学的な視点で言うと釣れない方が学びになるのでは。」
**担任 R 先生**:「ずっと、その子に付き合っていて、粘り強く頑張っている姿を見て、どうしても釣らせてあげたいと思った。」

**⑤考察**

現代の子どものたちの生活の中の身近な環境の一つの ICT を利用した YouTube 風の動画は、あえてなかなか釣れない内容であり、難しいから面白いと感じられるようになった。この時期の子どもたちだからこそ「やってみたい！」と心が動いたのだろう。トマトで釣れると仮説し、釣ろうとする子どもについては、結果よりもその経過や姿を認めたい。トマトでザリガニが釣れないことは、きっとこの先分かるだろう。大事なのは、じっくり待つ経験や自分の仮説を信じて試行錯誤している態度であるのでないだろうか。

日々の触れ合いの中で、ザリガニが生きているという実感が大事である。時間が経ってから、ザリガニ釣りの経験が今後の遊びに現れることもあるだろうと思う。

⑥出会われていない環境

本事例は、ザリガニ釣りと飼育を通して、散歩先であるメダカ池という場所とのかかわりを深めた事例である。

保育者は事例研究のなかで、生き物の命とのかかわりをどのように深めていくかという問いをもちながら、子どもたちが時間をかけて「まずは、死より生を感じる」ことが重要かもしれないという結論にたどり着いた。それまで継続的にかかわり深めることのなかった、地域の身近な自然環境とそこに住む生き物に改めて出会いなおしている点に、本事例の特長がある。

ここで保育者は、自身もザリガニ釣りを楽しみながらyoutube風の動画を作成し、ザリガニたちが何を食べるのか、という問いを提示している。「食べる」という行為は、多くの生命がその命を維持するために行う行為であり、何を食べ、何が好きなのかという問いは、子どもたちがザリガニが生きていることを実感する糸口となっている。釣りの餌を考えることを通して、子どもたちはザリガニにとっての様々な事物（食材）の「価値」を考え、実際に試す経験をする。それは、この後子どもたちが釣ったザリガニを再度飼育していくなかで、ザリガニとの関係を深め、生を実感していくことを支えると言えるだろう。

保育の現場には、大人にとっても子どもにとっても「気づかれていない命」（山本 2019a, p.225）が潜在している。園内研究をきっかけに、「生を感じる」方向へ保育が展開していったことは、今後も身近なところで暮らしている生き物とのかかわりを深める想像力や構想力へとつながっていくのではないだろうか。

（5）笠縫東こども園園内研究会のまとめ

①園内研究会で得られたものや自身の変容

「身近な環境を面白がれる子どもと大人」をテーマに一年間園内研究に取り組んできた。ザリガニやイシクラゲなどの身近な環境に注目し、出会いを大切にしてきたことで、子どもが物事を探求し、想像し、試していくといった幼児期に大事にしたい体験を積み重ねていくことができた。また、大人（保育者）にとっても、変容が見られた。

②テーマについて明らかになってきたこと

今回の実践を通して仮説していた大人も身近な環境を面白がることで、子どもたちの興味関心を引き出し、探求する心や想像力、試行錯誤する態度につながっていくことが明らかになった。また、子どもと大人の営みだけでなく、園内研究会を通して、共感や多面的な捉えなど、保育者同士のやりとりを重ねていくことで、身近な環境の面白さに気づくきっかけとなったり、価値を見出す足がかりになったりしていくことが分かってきた。身近な環境を面白がれるまでの営みとそれが生み出す環境の可能性を以下の図のようにまとめた（図3）。

子どもと大人が身近な環境を面白がること

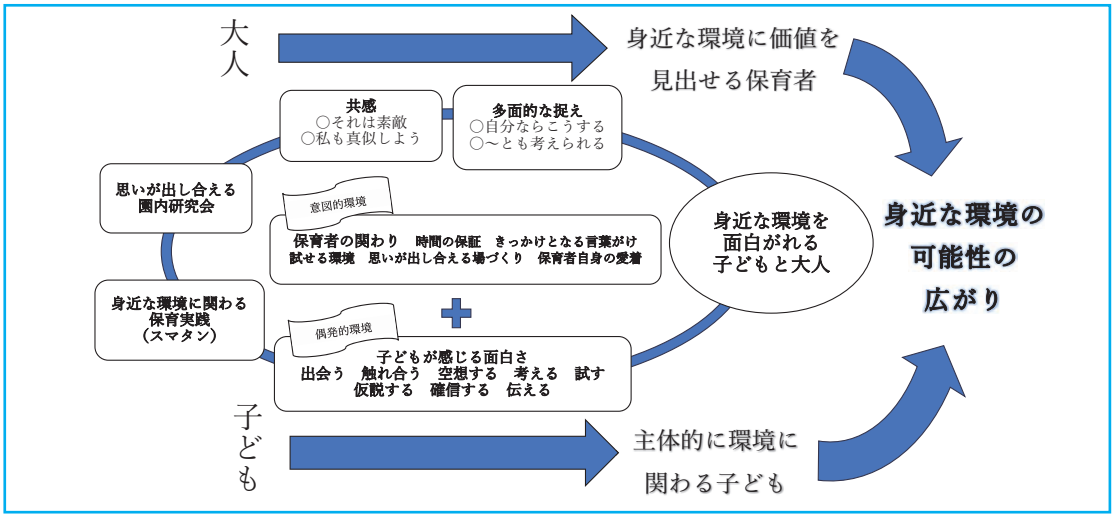


図３　身近な環境を面白がれる子どもと大人が生み出す環境

は、イシクラゲやザリガニなど、環境との出会いやそこから生まれる触れ合いや空想、試行錯誤する子どもの営みであり、主体的に環境にかかわる子どもの姿へとつながる。さらに、じっくりと環境に関われる時間の保証や保育者の投げかけにより、面白さが膨らんでくる。大人も立ち止まってその面白さに共感し、気が付ける感性があることで子どもと大人の面白さが継続し、環境の可能性は広がっていく。面白さは、身近な環境にこそ潜んでおり、それに気が付くことができる限り、身近な環境を面白がる子どもと大人の物語が終わることはない。

## 5　エコロジカル・アプローチとしての散歩を通した園内研究

以上のように、笠縫東こども園の園内研究を通して、保育者が子どもと共に身近な環境を面白がることの重要性が明らかになった。「散歩」はそのなかで、新たな事物との出会いや、身近な事物との出会いなおし、偶然の発見をもたらす点で重要な役割を担っていた。また、散歩を通した出会いのなかに想像力が働くことによって、事物の関係性への発想や問いが広がったり、類推から仮説が生じ、実験を構想したりといった探究活動が生じていることが明らかになった。

散歩という活動は、環境に潜在する「意味」や「価値」を探求するきっかけを与える。それは単に新奇なものとの出会いを生むにとどまらず、既知と思われていたもののなかに探究のきっかけを与えるところに意義があるといえるだろう。

図１に示したように、「出会われていない環境」には、保育者にとっての「出会われていない環境」と、子どもにとっての「出会われていない環境」があり、散歩は両者にとっての出会いを与える活動である。両者それぞれに異なる視点や想像力が組み合わされ、混ぜ合わされることによって、環境の「意味」と「価値」の探求が駆動され、集団化されていく。そのような出会いと探求は、保育者自身の変容を含んだ、保育実践へのエコロジカルなアプローチとなりえるのである。

以下は園内研究全体を通した振り返りの際に得られた保育者の語りの一部である。

【園内研究会を通して保育者たちの振り返り】
- 今まではスルーしていた雑草のようなものでも保育者自身が注目できるようになった。そして、自分でやったことが、事例研の中で他のクラスの先生にも分かってもらえることが嬉しかった。
- 自分もやりたいと思っていてやり方が分からなかったことを、他の先生が実践されているのをみて、刺激を受けた。進め方や援助の仕方について学ぶきっかけになった。
- 身近な環境を園庭でも見つけられるようになった。
- 事例のようなしっかりしたものを作るのはたいへんだと思っていたが、いつの間にか、ちょっとした子どもの姿もメモする習慣がついた。
- 自分も仕事外でも、園の周りを歩いたり、いろいろな場所を発見したり、地域に関心をもつようになった。ふるさとが好きな子どもになってほしいと思う。
- 他の保育者の事例をみて、自分の思いもしない発想を得られることは刺激になった。

以上の語りからも、「身近な環境を面白がる」園内研究が、保育者に与えるポジティブな影響が読み取れる。「出会われていない環境」と出会うことは、他者が世界を見たり感じたりする視点を経験し、自分だけでは見たり感じたりすることのできなかった環境の「意味」や「価値」を知ることにつながる。保育者の語りは、園内研究を通してそのような知覚変容と、子どもや他の保育者の感性の受容の経験が生じていることを示しているといえるだろう。

散歩の教育学的意義についての研究は、これまでほとんどが子どもの経験にとっての重要性を指摘するものであり、それが保育者にとってもつ意味に注目されることは少なかった。本研究は、散歩を通した「意味」と「価値」の探求が、子どもにとって楽しく豊かな活動であるのみならず、保育者が子どもの興味や想像力に沿って保育を構想し、自らも変容していく可能

性をもつものであることを示唆するものであった。さらに継続して保育者の観点に着目した研究を蓄積することが今後の課題である。

## 付記

本論文は、1、2および4の「出会われていない環境」を山本、3と4を高谷が主となって執筆した。5については共同で執筆している。

## 謝辞

本研究を実施するにあたり草津市立笠縫東こども園の先生方と子どもたちにご協力いただきました。心よりお礼申し上げます。

## 文献

Dewey, J., (1916) *Democracy and Education*, NY：The Macmillan Company.=1975 松野安男訳『民主主義と教育（上）』岩波書店

Dewey, J., (1934) *Art as Experience*, NY：The Berkley Publishing.=2005 栗田修訳『経験としての芸術』晃洋書房

ギブソン，J. J. 古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻訳（1985）『生態学的視覚論―ヒトの知覚世界を探る』サイエンス社

石倉卓子（2011）「幼児の表現を拓く自然材の可能性－アフォーダンス理論に示唆を得て」『富山国際大学子ども育成学部紀要』第2巻，1-12

Judson, G., (2018) *A Walking Curriculum: Evoking Wonder and Developing Sense of Place*（*K-12*), author.

鹿野晶子・野井真吾（2015）「保育園における幼児の「散歩」の効果検証：睡眠への生化学的影響を中心として」『笹川スポーツ研究助成研究成果報告書』279–285頁

河崎道夫（2015）『ごっこ遊び：自然・自我・保育実践』ひとなる書房

厚生労働省（2019）「保育所等における園外活動時の安全管理に関する留意事項」https://www.mhlw.go.jp/content/000521319.pdf

久保健太・坂本喜一郎・野村直子・宮里暁美 （2021）「散歩の意味をとらえ直そう―戸外の保育が学びをひらく」『幼児の教育』第121巻1号，5-21頁

倉橋惣三（2008）『幼稚園真諦』フレーベル館

三輪律江・尾木まり編 （2017）『まち保育のススメ―おさんぽ・多世代交流・地域交流・防災・まちづくり』萌文社

森英子・横松友義 （2014）「保育園の「園外へ歩いて出かける活動」に関する保育課程編成時の留意点―カリキュラムマネジメントの観点からの考察」『教育実践学論集』第15巻，101-111頁

リード，E. S. 細田直哉訳 佐々木正人監修（2000）『アフォーダンスの心理学―生態心理学への道』新曜社

寺本潔（1988）『子ども世界の地図―秘密基地・子ども道・お化け屋敷の織りなす空間』黎明書房

内田伸子（2017）『子どもの見ている世界―誕生から6歳までの「子育て・親育ち」』春秋社

Schutte, A. R., Torquati, J. C., & Beattie, H. L., (2017) Impact of Urban Nature on Executive Functioning in Early and Middle Childhood. *Environment and Behavior*, 49（1), 3–30.

下村健一（2017）『想像力のスイッチを入れよう』講談社

Taylor, A and Pacini-Ketchabaw, V., (2019) *The Common Worlds of Children and Animals: Relational Ethics for Entangled Lives*. London & New York: Routledge.

山本一成（2019a）『保育実践へのエコロジカル・アプローチ：アフォーダンス理論で世界と出会う』九州大学出版会

山本一成（2019b）「生活の中に潜在する多様な生の可能性」（笠原広一編『アートがひらく保育と子ども理解―多様な子どもの姿と表現の共有を目指して』東京学芸大学出版会）

Yamamoto, Y. (2022) Co-Living Imagination in Early Childhood: Toward Education for Sustainable Development Along Children's Ways of Life. *The Journal of School and Society,* 8（2), 45-58.